

座談会 8 **美術とテクネー** 下村 耕史、納富 信留、木俣 元一、秋山 聰

論文 26 芳賀 京子
彫刻家ポリュクレイトスの美術と技術 ^{テクネー} ^{テクネー} 間接失蠟鑄造法のはじまり
間接失蠟鑄造法は同一物の複数生産を可能にする画期的な技術であり、それだけに古代ギリシアでいつブロンズ像制作に導入されたのかは長く議論されてきた。筆者は3D形状比較の手法を用いて、彫刻家ポリュクレイトスが前5世紀半ばにこの手法を使用し、《槍を持つ人》の顔や足の原型を自身の別作品にも利用したことを明らかにする。同一作品の複数鑄造は行わなかったとしても、彼は間接失蠟鑄造法の先駆者と言ってよい。

41 下村 耕史
デューラーにおける kunst
デューラーの美術理論の研究において kunst は比例のとれた人体表現を意味する。更に kunst は調和、中庸、過小・過多の観念と結びついて、彼の美術理論の中核をなすに至る。最後に「審美論補遺」所収の「奇異な話」で kunst は、美術家の創造的想像力を示唆する。本論文はデューラーにおける kunst の概念を分析することで、彼が最終的に創造的想像力という近代的美学の観念を萌芽的に抱くに至った過程を考察する。

57 桑木野 幸司
パドヴァ植物園 (1545年) と建築家ダニエーレ・バルバロ
科学・芸術・人文学の交わる空間
西欧で最初の近代的植物園として歴史的価値が高く、世界遺産にも登録されているパドヴァ植物園。1545年に建設された同園は、後に建築理論家として名を成すヴェネツィアの人文主義者ダニエーレ・バルバロが、最初の公務として、若き日にその開設業務に携わったことが知られている。本論文は史料の読み直しと、新たな文献の読解によって、これまで詳細が不明であった同園の初期プランを復元するとともに、そこにバルバロの建築思想が反映していた可能性を指摘する。

77 松井 裕美
芸術史における解剖学というトpos キュビズムからシュルレアリスムまで
本論考は、キュビズムからシュルレアリスムに至るまでの前衛芸術が、如何に科学的な目的とは異なるかたちで解剖学的イメージを活用してきたのかを論じる。一般にこうした前衛芸術は、人体を再現的に描く目的で発展した美術解剖学とは無縁であると考えられる傾向にある。しかしこうした芸術の担い手たちが、しばしば、美術解剖学そのものが持つ身体像の描出方法への問いに応答しながら、独自の表現を模索していたことを明らかにする。

97 河本 真理
カモフラージュ 美術／生物学の交差する戦線
本稿では、主に第一次・第二次世界大戦期のカモフラージュにおける、美術と生物学の関係性を考察する。19世紀末にアボット・H・セイヤーによって発見された、自然界のカモフラージュの原理——「カウンターシェーディング」と「迷彩模様」——は、次いで軍事カモフラージュに適用された。軍事カモフラージュには生物学者だけではなく芸術家が携わり、両者の関係は、時には「競争」、時には「コラボレーション」となった。こうした複雑な関係を紐解いていくことで、自然界および軍事のカモフラージュが、造形言語にいかなる変容をもたらしたのかを明らかにする。

研究ノート 124 太田 泉 フランス
パネル型聖遺物容器の携帯性をめぐる二、三の考察
《リブレット》の技術的特徴を中心に

136 木俣 元一
西洋中世美術におけるダイアグラム 科学・宗教・芸術

144 ジャン＝マリー・ギルエット 木俣 元一 [訳]
ハイパーテクニク・ゴシック?
中世末期の建築技法に関するマイクロヒストリー (1400-1530年頃)

155 尾崎 彰宏
生命をつくる画家・錬金術師レンブラント
2点の解剖学講義を手がかりに

171 請田 義人
現前する聖人とその奇跡の「とりなし」
聖ヴァンサン・ド・ポールの聖遺物をめぐる造形 (1827-30) について

原典資料紹介 193 尾関 幸 [訳・解題]
アルフレート・ヴェーバー「文化表現と技術」

資料 209 **文献リストと解題** 木俣元一 [編]

研究ノート 220 渋谷 拓
1855年のパリ万国博覧会における美術展
ディズデリによるドラクロワ個展エリアの記録写真について

展覧会評 237 木俣 元一
「ゴシック彫刻の誕生——サン＝ドニ、パリ、シャルトル、1135-1150」展
クリュニー国立中世美術館、パリ、2018年10月10日～12月31日

245 大野 松彦
「皇帝カール4世 1316-2016年」展
ヴァルトシュテイン馬術場厩舎、ブラハ、2016年5月15日～9月25日
ゲルマン国民博物館、ニュルンベルク、2016年10月20日～2017年3月5日

256 関府寺 司
ファン・ゴッホ美術館50周年
「オーヴェールのファン・ゴッホ」展 ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム、2023年5月12日～9月2日／オルセー美術館、パリ、2023年10月3日～2024年2月4日
「フィンセントのために あるファミリー・ヒストリーの肖像」展 ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム、2023年2月10日～4月11日

エッセイ 266 森 望
レンブラントの解剖絵画にみる画家と外科医のクロストーク

あとがき 271 木俣 元一

執筆者紹介 272